



それら治を施された者たちも同にそのことを理解し、神を美し、称したのです（マタイ15: 31, ルカ13: 13, 17: 15, と 4: 21）。イエス自身もラザロをらせる前には「あなたが私をお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです」（ヨハネ11: 42）と言ってそれが人々へのしるしとなるよう神にしています。イエス（彼に平安あれ）は追者たちに、もし彼らに信仰があれば、彼らも彼のようなことが出来ること（マタイ21: 18 22）、また他者は「もっと大きなを行うようになる」（ヨハネ14: 12）と述べ、「メシアや言者が来て、大きなしるしや不思議なを行う」（マタイ24: 24）ことを警告しているのです。

また、なぜイエス（彼に平安あれ）はキリスト教において神でなければならないのかと熟考する必要もありました。なぜ人を神格化しなければならないのでしょうか？主流のキリスト教では、イエスの死が全人の罪の罪として事足りるのであれば、彼は神でなければならないはずだときます。そうだというのなら、神はそのときに死んだのでしょうか？

彼らの答えは「いいえ」でした。彼らは、人としてのイエスが死んだのだと言います。ではなぜ他の人の死では事足りないのでしょ

うのでしょうか？キリスト教では、人はみな父祖アダム

の罪を受けいでいるため不完全であるものの、イエスは父なくして生まれたためこの罪から白であるときます。このを深く掘り下げるほどに、それはガタガタと音を立てて崩れていくのです。イエスは母から生まれなかったのでしょうか。マリアは主の御前において罪を犯したアダムのイヴの子ではなかったのでしょうか。罪が世代と共に受けられるという原罪を信じるということは、罪を犯したアダムとイヴが完全には赦されなかったということ

を信じることになります。公正かつ慈深き神が、私が犯さなかった不正について私の任をうなどということはあり得るのでしょうか？切で慈悲深き神は、私が防ぐことも禁じることも出来なかったような罪について、私の任であるとするのでしょうか？

私はイエス（彼に平安あれ）だけでなく、彼に先立つ他のいかなる言者たちも原罪についていてはいなかったことを知りました。イエス（彼に平安あれ）は、子供のさに



“私があなたがたにした言はであり、命である。”（ヨハネ6：48-63）私は、ムスリムたちが言っていたように、「代キリスト教はイエスを崇める宗教であり、イスラームはイエスが崇めていた宗教である」というのが正しいのではないかと感じ始めました。

血の罪の教は、パウロの福音（第2テモテ 2：8）によるもので、彼はそれについてこう述べています。“私はこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、示によって知らされたのです。”（ガラテヤ 1：12）パウロはイエス（彼に平安あれ）に会ったこともなければ、イエスの弟子から学んだわけでもありませんでした。彼は言います。“私は、すぐ血肉に相するようなことはせず、また、エルサレムに上って、私より先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退きそれから3年、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、15日 彼のもとに滞在しましたが、ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました キリストに ばれているユダヤの 教会の人々とは、知りではありませんでした。その 14年たってから エルサレムに再び上りました。”（ガラテヤ 1：16 2：1）

初代教会についてのバイブル学者の著をむにつれ、このことはより厄介になりました。パウロは彼によるイエスの福音を 邦人へ宣教する旅に出ました。彼は多くの追者や弟子を得るようになりました。パウロの教えは、イエス（彼に平安あれ）の元来の追者や弟子たちである、ユダヤ人キリスト教徒たちの教えとはなるもので、それは初代教会に重大な分裂をもたらしていました。人々は「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」と言い合っていました（第一コリント 1：12）。やがてパウロはイエスの弟子であるケファ、バルナバ、「イエスの兄弟」であるヤコブの弟子たちとし、彼らは“心にもないことを行い せかけの行いに引きずり まれた”（ガラテヤ 2：13）として非 しました。パウロはイエス（彼に平安あれ）の の福音を いたとしてコリント人たちを叱 し、彼自身について、“大使徒たちと比べて、わたしは少しも引けは取らないと思う”（第二コリント 11：5）と言っているのです。

初期キリスト教の 史を学ぶことは、 くことの で、私の目を ましました。初期には、本 的な教 についての合意がなかったのです。イエスの性 を定 する理 について、果てしなく が り返されました。そこでは完全な人 性を びたイエス、完全な神格性を持つイエス

